館山の生んだ彫刻家

1

俵光石

高村光雲に学び、東京美術学校の教師に。将来を望まれたひとりの芸術家は、故郷、館山で市井の石工として生涯を終えた。

明治時代、近代美術の草創期を生きた光石

日本を代表する彫刻家・高村光雲に学び、明治からの近代彫刻の足跡を館山に残した彫刻家がいます。

俵光石、明治元年生まれ。西洋から続々と入ってくる新しい芸術と日本伝統の文化がせめぎ合うように過熱していった激動の時代を生きた芸術家です。

光石（本名・房吉）は、旧楠見村（現館山市楠見）の石屋、俵家に生まれました。家業の石屋は光石の肌に合ったのか、石彫に対してなみなみならぬ探究心を燃やしていたといいます。

そんな光石の精進、探究ぶりを、ある著名な彫刻家の知るところとなったのは、明治20年代前半のこと。若き光石に注目したのは、当時、馬の彫刻で名をはせていた後藤貞行。明治24年には後藤のもとで仕事をしており、そのときの光石の評価は「社会的に現れないが、腕のある人」というものでした。

この頃、ちょうど東京美術学校が開校、明治25年には彫刻科の実習を木彫科、石彫科、牙角彫刻科に分割し、日本での本格的な彫刻教育を始める準備を進めていました。教授には、高村光雲など一線の芸術家が揃っていました。

その技巧をかわれて石彫科を新設し教官に

光石の才能に早くから関心を持っていた後藤貞行も、この東京美術学校の教師をしており、詳しいいきさつはわからないものの、高村光雲の要請で光石を光雲のもとに預けます。光雲は光石を指導して、石彫科開設を進めます。そして、明治27年、光石は彫刻科石彫教場助手に任命されました。東京美術学校初の石彫教官ではないかと言われています。

このころから光石は、本名の房吉にかえて光石を名乗るようになりました。確かな文献がないのでわかりませんが、師たる高村光雲から名の一字をいただいたのではないでしょうか。名前から当時の光石の誇らしさが伝わってくるように感じられます。

光石は翌年明治28年に京都で開催された「第4回内国勧業博覧会」に出品。目録には、「置物（大理石羊）四拾八円俵光石」とあります。当時は書籍1冊20銭の時代。48円の価格に、光石の気負いと自信のほどが感じられます。

この時、光石は京都で山本瑞雲ら僚友と記念写真を撮っています。その後、瑞雲は外遊していますが、光石は外遊できず、このことを生涯くやんでいたといいます。

突如館山に帰郷 家業の石屋を継ぐ

後藤貞行や高村光雲に師事し、東京美術学校の教師にまでなった光石ですが、突如、地元、館山に帰郷して家業の石屋を営みはじめます。その理由を探る文献、資料、聞文は、いまは残されていません。

館山での光石は、何人かの弟子をとり、近隣寺院の石彫仏像、神社の狛犬などを彫っていました。日本古来のものだけを彫る館山での光石は、石彫を通してなにを語りたかったのでしょうか。

ルック館山15、(1998.8)

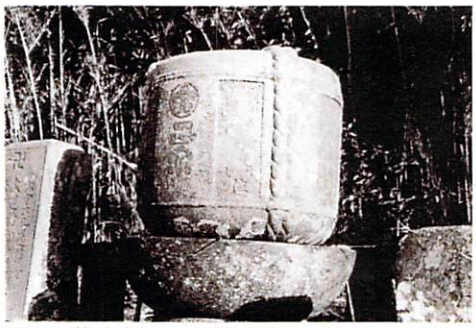
明治28年、京都の第4回内国勧業博覧会に出品した頃の若き光石(左)

不動尊立像　不動尊坐像
明治30年(館山市上真倉　妙音院)
台座を含めて50cmほどの石像。石彫では出しにくい衣のシャープさは木彫の影響か

虎像　テラコッタ　大正3年(館山市館山　俵家)
テラコッタとは素焼きのこと。光石は陶業を手がけていて、虎像の刻印にも「安房陶器創業者　光石」とある

釈迦坐像　明治36年(館山市館山　三福寺)
刻印に「高村光雲門下　俵光石彫刻」とある。三福寺は俵家の菩提寺。2mほどの基壇台座の上に、光背と一体となって坐す釈迦像

地蔵尊倚像ならびに両脇侍立像　明治33年(館山市南条　観音寺)
2m余の基壇の上に坐する地蔵尊



酒樽墓(館山市布良　本郷観音堂)
故人が酒造りにたずさわっていたのか、それともたんなる酒好きだったのか。不謹慎とも粋ともとれる作

南陽坪野先生之墓上部彫込地蔵尊
(館山市上真倉　慈恩院)
墓石の上部に地蔵尊を彫込んだ光石作による墓

魚藍観音像　昭和6年(館山市長須賀　保科家)
総高48.5cmのブロンズ像にも似た光石63歳の円熟の最晩年を象徴する作。3体同時に彫ったというが、ほかの2体は行方不明

狛犬　大正6年(館山市館山　館山神社)